

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】新津厚子

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院

【研究題目】

チカノ壁画の公共性—ロサンゼルスにおけるコミュニティ壁画の価値考察—

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は米国ロサンゼルスで「チカノ(Chicano)」と名乗るメキシコ系の人々の壁画制作の諸相から「チカノ壁画」の公共性を論じることである。ここでいう壁画の公共性とは、特定のコミュニティにおいて社会生活を構築する諸個人の葛藤、苦悩、喜び、希望を、より広い社会・文化・歴史の文脈へと接続する壁画の役割を指している。チカノ壁画の公共性を論じるために、本研究では「東部ロサンゼルスの『チカノ壁画』は、米国メキシコ系コミュニティの『集合的記憶』を形成し、保存している」という仮説を立て、その仮説の検証を試みる。ここでの「集合的記憶」とは、大きな歴史の文脈では取り上げられることのない、マイノリティの草の根の記憶の集合である。チカノたちの証言もふまえながら東部ロサンゼルスの壁画を検証・分析することで、これまで抽象的・象徴的にのみとらえられてきた「チカノ壁画」を実証的に明らかにし、地域研究の視点からロサンゼルスにおける「チカノ壁画」の文化的価値とその変容を明らかにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

研究内容・方法は、東部ロサンゼルスでの壁画調査・記録、参与観察、資料調査である。*Street Gallery: Guide to over 1000 Los Angeles Mural* (Dunitz 1998)の壁画の記録をもとに、米国東部ロサンゼルス(ボイルハイツ、リンカンハイツ、ベルベデール、シティテラス、イーストロサンゼルス、マラビジャハイツ、ラモナガーデン、エストラダコート)での壁画調査と写真撮影を行った。2017年8月25日から9月2日までの予行調査に加え、本調査として2018年12月23日から2019年1月6日の期間、イースト・ロサンゼルスに滞在した。現地在住のツアー会社に2日間調査補助を依頼し、車で調査を行った。その後は、自転車、公共交通機関、徒歩で壁画の所在確認と記録を行なった。壁画制作を行うインフォーマントの家族とも交流し、コミュニティにおける壁画の位置づけを確認した。また上述の先行研究であるロサンゼルスの壁画をまとめたRobin.J.Dunitzともコンタクトをとり、彼女が住むポートランドでインタビューを行ない、1998年のロサンゼルスの様子や調査をはじめた背景について聞いた。現地コミュニティでのチカーノ図書館や公立図書館でもチカノ壁画にかんする資料を確認し、その後入手した。調査結果を踏まえて必要な一次・二次資料を入手し、読解と議論の整理を行なった。また記録した100以上壁画を整理し、その中から特徴のある壁画を選定して「本文解釈(エクスプリカション・ド・テキスト)」も行ない、チカノ壁画の表現形式について考察した。またコミュニティ壁画の歴史を整理するために、雑誌*Community Mural Magazine* 1981-1987と*Community Murals: People's Art* (Barnett 1984)の読解を行った。

【結論・考察】(400字程度)

2019年9月の時点で、東部ロサンゼルスでの壁画調査とその解釈をふまえて、「チカノ壁画は米国メキシコ系コミュニティの『集合的記憶』を形成し、保存している」という仮説は正しいという結論を出している。なぜなら壁画上に描かれている主題は、チカノの権利向上運動や公民権運動を主導した英雄や、メキシコを思わせる複数の図像、かつてあった路地の名前など「かつてあり、今はないもの」が多く確認できるからである。上記の理由からもチカノ壁画は、コミュニティに住む複数の人びとによる制作を通じてチカノ・コミュニティを形成する「コミュニティ壁画」とであると指摘できる。すでになくなった壁画もあるが、現在も上記の特徴を備えた壁画は制作されている。チカノ・コミュニティにとってチカノ壁画は不可欠な文化財であ

ることも確認できた。

またチカノ壁画の表現形式の特徴は、上述した主題のほか、時間軸（過去・現在・未来）、空間軸（農村・都市・メキシコ・ロサンゼルス）、制作者の複数性にある。多くの場合、壁面には複数の物語が存在する。これらの特徴を総称し、チカノ壁画の表現形式を「物語歌」的表現形式として名付けたい。